

函館の教育のあり方検討協議会（第3回）会議録

日 時	平成28年10月18日（火）18：30～20：13
場 所	函館市役所本庁舎8階第2会議室
出 席	<p>委 員</p> <p>田 中 邦 明（北海道教育大学函館校教授） 大 場 みち子（公立はこだて未来大学教授） 齊 藤 縁（北海道教育大学附属函館幼稚園副園長） 山 田 幸 俊（函館市小学校長会事務局長） 毛 利 繁 和（函館市中学校長会事務局長） 中 島 悟（北海道高等学校長協会道南支部長） 中 村 和 代（函館市PTA連合会事務局長） 絹 野 重 治（函館市社会教育委員） 竹 内 正 幸（函館商工会議所事務局長） 井 上 実 香（公募）</p> <p>事務局</p> <p>木 村 雅 彦（学校教育部長） 佐 藤 ひろみ（生涯学習部次長） 鶴 喰 誠（生涯学習部次長） 加 賀 重 仁（学校教育部学校教育課長） 柴 田 成（学校教育部学校再編・計画担当課長） 寺 本 公 彦（学校教育部教育指導課長） 小 松 将 人（学校教育部教育指導課指導主事） 村 上 貴 洋（学校教育部学校教育課主査） 松 本 大（学校教育部学校教育課主事）</p>
欠 席	なし
傍 聴	3名

1 開 会

出席者10名。過半数を超えているため、会議成立。

2 議 事

(1) 函館市教育振興基本計画の基本的方向性について

(田中会長)

これまで2回の協議を行ってきた。第1回はまちづくりの視点、第2回は教育における多様性の尊重ということで議論を深めてきた。ここで前回欠席した中村委員に教育における多様性の尊重の視点に関してご意見を頂戴したいと思う。

(中村委員)

前回はPTA連合会の大きな行事に関わる会議と日程が重なり、欠席することになりました。すいませんでした。

第2回の会議につきましてご報告をいただき、教育における多様性の尊重の視点からも含めて私が改めて感じたことがあったので、この場をお借りしてお話したい。

それは、家庭教育の大切さについてだ。教育と言っても勉強ではなく、子育てを通して人との関わりやつながり、生きるための知恵、自立心などを親も子も学ぶこと。

昔も今も子どもは様々な事情や個性とともに生まれてくると思うが、子育ては一人っ子でも兄弟であっても、それぞれ違うので手探り状態といえる。私はちょうど16年前の今日、息子を産み、その2年後に娘を産んだが、どちらのときも七飯町に住んでいる実家の両親に、昔の人の知恵や話し相手、子育ての相談という点で随分助けられた。だが今は地域や社会から孤立している家庭が多くなってきているように感じている。そんな家庭や私を含め子育て中の親たちが地域や社会とのつながりを感じるのが子育てや家庭教育に活かされるのではないかなと思う。

そのひとつに、私も関わっているPTA活動があり、その活動や研修会等への参加を通して自ら学ぶことができる。そしてその経験から他の親たちとつながり、地域と大人としての自分の存在や役割を見つけていき、自分の子供だけではなく、函館の子どもたちを街の大人として育む仕組み、例えば、家庭と学校と地域と企業など函館市全体が連携して子育てができるまちづくりができれば良い。また、そんな大人たちを見て育った子どもが、函館に住む大人として同じように子育てをしていくといった良い連鎖が生まれることを願いたい。そういう気持ちを持ちながら、今日の会議も参加

したい。以上です。

(田中会長)

中村委員ありがとうございました。

ただいまの発言は、本日の縦の接続という視点での議論に深く関わってくると思う。それでは今のご意見について、皆様からここで申し上げたいということがあったらお願いしたいと思う。よろしいか。

早速だが、本日の論点は、教育の縦の接続の視点であると私は認識している。具体的に言うと、これまで函館スタイルという教育が話題にのぼっている。体育の分野では、函館の子どもたちの体力を確保するために固有の指導のスタイルが確立しているという独自の取り組みがあった。そういう函館らしい縦に接続した教育、それから縦に接続した教育というのは簡単にできるものではないと思うので、そういったものを確保するための様々なセクター、企業、学校、家庭、それから地域のコミュニティ、町内会など様々な組織を結んだことを想定されていると思う。

そういうものを私どもは教育のステークホルダーとかセクターというふうに呼んでいる。そういったものの支援のあり方、連携のあり方、これはむしろ横、横の場合は接続ではなくて連携といった方がいいかもしれないが、なので本日の論点は、縦の接続、小学校から大学、就職していく社会の様々な企業や自治体、そういった社会の組織、そういったものまでの子どもから社会人までの縦につながっていく教育のあり方、広い意味でのキャリアのあり方。

それとそういったキャリアを貫徹できるための横の連携、子どもや子どもを育てる親を、家庭をどう支援していくかという連携のあり方、これが今日の2つの柱、縦・横の柱になるかと思う。

縦の接続、横の連携、これが今日のキーワードだが、これが何故教育に必要なのかということ、縦の接続というのは非常に抽象的な表現だ。何かの一つの比喩だと思うのだが、この縦の接続は何故重要なのかということについて、それぞれの委員がどのように捉えているかということをお聞きしたい。私は高等教育だから、高大連携や、企業にどのように学生を就職させていくか、そういう視点でいつも見ているが、私と皆さんでは違った視点で接続の問題点を感じられていると思うので、問題点と、接続ということをお聞きしたい。その教育的な意味、それをどう理解されているのか。

前は幼稚園の方から発言していただいたので、大場先生、上の方から参ってもよろしいか。社会と大学の、そういう接続が我々主要な議題となっているが、いかが

か。

(大場委員)

私は大学の教員になる前に民間の企業にいたことから就職委員長を担当しており、そこで思うことについて。大学の接続としては、入口は高校で、出口が社会である。

その時に大学の中ではスルーで行くわけではなくて、自分の得意なところ、もしくはやりたいことということでコース分けして、そして出口として会社がある。そのマッチングがうまくいくとハッピーなのかなと感じているが、まず入口として少々問題だなと感じているのは、私の大学は情報系であり、特に数学を重視しているが、偏差値で来てしまうと、大学に来てそのまま卒業に至らないケースが出てくる。一生懸命やっても、自分の意志がきちんと固まらなく、となると、出口、どこに行けばいいかについて、未だに3年生、もうすぐ出口というところでも迷っている学生たちが多数いる。そのような意味では、ずっと、どのように将来自分がなりたいかという理想なり、考えみたいなのをまとめていくことができれば、そのような状況が縦の接続として作る必要があると感じている。

(田中会長)

では、高校はいかがですか。短くて結構です。高校から大学の接続にはどのような教育的な課題があるだろうか。

(中島委員)

高校と大学の接続については、まず、高校のことだがキャリア教育ということで、自己理解や、自分の適正、将来の希望ということ、やはり将来の目標を、自分から答えを見い出せるような、そういった指導ということでいろんな取り組みをしている。特に大学等については、例えば大学の説明会、あるいは出前授業に来ていただき、大学の実態等について説明するなどということで、それぞれの子どもたちの興味・関心に応じた形での進学先の選択について、学校として様々な形でアプローチしている。

(田中会長)

ありがとうございます。それでは、今、高校まで来た。中学校として、高校受験という問題にどのように取り組んでいるだろうか。

(毛利副会長)

高校受験、今の高校は非常に多様であり、昔に比べ選択肢の幅はとても広がっていると中学校側では感じている。ただ、大場委員が述べたように、大学3年生でも迷うぐらいなので、ましてや、中学校の2年生や3年生で、もちろん目標を立てるのは観点から言って大事なのだが、果たしてそのまま行けるかどうかということについては、そのまま進む子はむしろ少ないと思っている。ただ、いざ高校の選択にあたっては、非常に幅があるという感触はある。

問題はそのことをきちんと理解して受験しているか、選択しているかだが、そこまで判断できる力が育つてと思えないので、一層キャリア教育の視点がいま叫ばれて、実際、小学校、中学校でも、そのような取り組みを行っているという状態である。ただ、選択を見てみると、中学生よりも、親のほうに偏差値の偏重状態にあるかと思う。中学校の教育に携わる者としては、少しはチャレンジしてほしいと思う。

(田中会長)

小中の接続というのは、何か感じられることがあるだろうか。

(山田委員)

小学校は幼小と小中がある。いま小中ということなので、小中の接続では、中1プロブレムという言葉が流行してから随分と小学校と中学校の連携というのは密になってきている。以前であれば中学校は中学校、小学校は小学校で、子どもたちが中学校に行くと問題行動を起こすと、小学校では、中学校行ったら変わったねと言っていた。しかし、その芽は小学校の時からある。そのあたりの小学校における自覚というのも、どんどん変わっており、指導も中学校の生徒指導と内容的には似てきていると思っている。

小中の交流もやはり活発になってきており、子どもの交流、教職員の交流というものもやっている。これがさらに活発になっていくと、小中の垣根は無くなると思うが、あと、もう一つ、前回の多様性の中で出てきたが、特別支援教育に関わることもあり、その縦の接続というのも、さらに考えていかなければならないと感じている。

(田中会長)

では、幼小というのはいかがだろうか。

(齊藤委員)

幼稚園の接続の役割としては大きく2つに分けて考えている。1つは教育課程内で質の高い幼児教育を行う役割、もう1つは、先ほど出ていた横の連携、教育課程外で幼稚園として地域の子育て支援センター的な意義を果たす役割である。

縦の接続については、文科省から次の学習指導要領で出るであろう「幼児期までに育て欲しい具体的な姿」というところを把握して、幼稚園の中でそこをしっかりと育てきり、小学校に接続していくということである。今、小学校ではスタートカリキュラムが作られていると思うが、幼稚園の実態や幼児教育ということを理解しなければ作ることができないと考えている。そこで小学校と連携しながらスタートカリキュラムに関わり、それから幼稚園自体としてアプローチカリキュラムを作っていく、それらを接続していくという道筋が必要である。今、幼稚園では後半期に入り、年長は接続期に入っているので、接続カリキュラムというのを考えながら作成し、検証しているところだ。

そして、教育課程外の横の連携と関わる部分としては、子どもを育てるということ、根幹に家庭教育があってそれから学校があるので、幼稚園教育・保育は、生涯において大事な家庭教育と密接に関わるという役割もあると考えている。その中には預かり保育や給食、さらに未就園児の体験入園などがあり、先ほど中村委員が述べていたように、親が手探り状態で子どもを産んで育てているときに、今、学びたいこと、今、聞きたいこと、今、知りたいことに関してタイムリーに相談にのる、一緒に寄り添って考えていくなどの保護者のニーズに応えていくものもある。例えば、学ぶということも、教育となると少し敷居が高くなり、即効性がないこともあるため、今これが困っているという困り感を知り、今すぐ役立つような情報をお知らせすることも、接続と教育の一番下でスタートである幼稚園という立場においては必要なことと考えている。

(田中会長)

ありがとうございます。

竹内委員はたぶん社会として、まさに企業の方、社会で迎える立場ですので、最後に答えを出されることになると思う。中村委員の発言に続いて、多様性のところから今、我々の理解している接続の問題と、その課題であった重要性について共通理解を図ることができたと思う。

前回、8月の会議からかなり時間が経っているが、事務局の方から資料1、2と用

意されているので、我々の到達点、今日の主要な課題である縦の接続に繋げてくださるはずだと思うので、説明をお願いします。

《事務局より、資料1、2に基づき説明》

(田中会長)

資料1の図について質問や意見があればお願いしたい。よろしいだろうか。

それでは、縦の接続について、それぞれの接続のポイントの論点について皆さんの意見をいただきたい。皆さん違ったイメージだと思う。いかがだろうか。能力的なギャップがある、特に小学、大学で言うと1年生に入ってきている学生に対して大学教員はやはりフラストレーションを感じるころがある。そういった現状は不連続があるということだと思う。その不連続の問題がスムーズに行くと思えば早いということになると思うのだが、先生方の立場ではどこが一番大きいギャップがあると考えられているだろうか。

(毛利副会長)

最初に中村委員の出された子育てのことと、齊藤委員から出ていた話について、その部分のギャップを知りたい。

(田中会長)

そこは新しいところだった。アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムという固有の名前が出たが、これはどのような発想で作られたのか、説明をもう一度お願いしたい。

(齊藤委員)

スタートカリキュラムについては、それぞれの小学校で作られているところである。幼児期の遊びから小学校への学びへと、教育を取り巻く環境やその目指すものは大きく違っている。それで、子どもたちが幼稚園から小学校に入学する上でつまづく部分については、例えば、すぐに国語・算数という45分授業ではなく、15分単位のモジュールを組んでみるとか、生活の中で、幼児教育で行っていたことを発展させてスムーズに小学校の教育に馴染むようにするなど、小学校の方では、どの学校も取り組んでくださっている。

幼稚園としてはその取り組みを受け、子どもたちをそのまま真っ直ぐ送り出す上

で、小学校というものをよく理解して、小学校の教育を考えながら幼稚園サイドで園児の発達段階にふさわしい内容を考えていくものがアプローチカリキュラムだ。これは幼稚園内の中で完結をしていく。幼稚園のアプローチカリキュラムは年長だけでなく、年少、年中と、幼稚園の中でそこに向かっていく姿として教育課程内で組んでいくものだ。アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを繋ぐ部分が接続カリキュラムである。今日から小学生ですとなった時にギャップを感じるので、アプローチカリキュラムの中の年長の後半期には、先取りをするということではなく、接続を意識したカリキュラムを組んでいくことが必要である。

今、話があったそれ以外の接続という部分で、先ほどの中村委員と合致している部分というのは、1人の子どもが幼稚園から小学校に上がっていく中で、子どもとしては変わりがなく、変わるのは環境だということ。同じように、親はずっとその子の親であり続けるということで、学校教育でやれるべき範囲には限界がある。例えば、生活習慣など家庭教育の部分でやってほしいが、それぞれ身につけておいてほしいことがうまくいっていないと学校現場としては感じている。例えば、幼稚園などで初めて親が自分の子どもを社会に出していく時期に、親として自覚をするまでにいくら高校や大学、専門学校で、家庭や育児のことを学んだとしても、すぐ身近にそういう事象が起こらないので、机上の空論で終わっている。家庭を持って初めてそこから学んでいくものだ。だから、例えば、PTA活動や地域などで繋がっていく横の連携の接続部分があっていいのではないかと考えるのである。

(田中会長)

スタートカリキュラム、アプローチカリキュラムというのは、子どものためのカリキュラムである。何故、昔はうまく接続できていたか、今、接続できていないかという大きな疑問には、子どもの暮らしている幼稚園、保育所以外の家庭の中にあるという問題がある。そこのウェイトが非常に大きく、今、クローズアップされていることなのかもしれない。そうすると、接続をいかにうまくさせるというところには、社会的に家庭を支援していく、あるいはそういうお互いに学び合うような機会を設ける、そういう支援が社会に、親と子どもと社会というふうに、コミュニティというんでしょうか、そういう繋がりが接続のところで固まっているという点が、幼児教育と小学校課程で少し見えてきたような気がした。それが同じようなことが小中にもあるだろうか。小学校と中学校のギャップとそれをうまく解く方法というか。

(毛利副会長)

山田委員と齊藤委員が述べたように、以前と比べて繋がりが高まる機運はある。これは明らかに以前と比べても変化しているところだ。

(田中会長)

これは学校という視点ですね。

(毛利副会長)

そうです。これはある意味、社会の声もあるだろうし、それから単純に、率直に言う親のニーズというより、やはりある程度の強制力があって当然そのような繋ぎをしているうちに、忘れてはいけないのがカリキュラムをいくら作っても、子どもにとってそれがどうなのかという視点である。いくらシステムや仕組みができて、そこにいる子どもの意欲はどうなのか、それから親の子育てに対する気持ちがきちんと拾われてるのか、救われてるのかという視点がない仕組みは、何にもならない。

そのような意味では先ほど、最初の話に戻って、非常に質が高まる機運にあるという事は、やはり、相当面での質が高まっており、効果が上がっている。卒園に向けて例えばこういうカリキュラムで、小学校で入学直後はこういうカリキュラムというものは昔からあった。今、初めて出てきたわけじゃないんです。昔からあったが、質が上がってきているという段階にあるということだろう。

(田中会長)

個人的に教員のスキルでやっていたものが組織的に・・・

(毛利副会長)

それはあるかもしれない。ただ、今、話を聞いていて少し気になるのは、幼児教育というのは、結局、義務教育ではない。そうすると大きな差が出てしまう。そうすると、小学校に上がってきた時は、やはりそれなりの苦労や工夫があるだろう。

小から中というのは小学校教育を経て中学校に入りますし、山田委員が述べたように以前と比べると中学校の先生が小学校に行ったり、それから小学校6年生の時に必ず中学校での体験の学習が組まれている。そういう意味では以前より小中がスムーズになってきている状況であり、世間で言う中1ギャップというのは、私にはあまり函館市の場合にはきつくないほうじゃないかなと思っている。そこでどうしようもな

くなってリタイアするという事とか、そういう事というのは函館市の場合は、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問集に今年から新しい項目ができたが、その中でも、生徒と先生の関係が、上と下、教える者と教えられる者のような上下関係でない様子がきちんと現れています。ですので、中1ギャップとか、そういうところは多分世間で思ってるほどひどくはないと、現場にいると感じます。ということで終わります。

(田中会長)

今の件についてご質問はあるか。

高校はそうなってはいないですなど、もしあれば。

(毛利副会長)

高校では結構あるだろうか。

(中島委員)

本校では、そういったギャップということでは、あまり目立った事例というのはないと思う。ただ、前回も少し申し上げたが、特別な支援を要する生徒など、中学校時代に不登校の経験がある生徒が高校に入ってきて、学校の環境が変わるということもあって、欠席をしだすと色々な手立てを講ずるのだが、義務教育と違って高校の場合は出席日数などそういう面があり、担任も家庭訪問を行うなどして対応しているが、ちょっと救いきれてない事例というのが、確かにあると考えている。

(田中会長)

不登校の問題は学年が上がるほどクローズアップされており、義務教育でないという側面もあって厳しい。

(中島委員)

そうですね。はい。そういった違いがある。

(田中会長)

それではギャップの問題、いわゆる学習環境に馴染んでいるかどうかというものに対して、ちょっと特化してみたいと思う。毛利先生の方から先ほど、キャリア教育の問題について話があった。いわゆる進路がしっかり固まってきているのかというこ

と。大場先生も、たぶん大学に入ってくるということは偏差値で来るわけだし、高校はやはり偏差値で入ってくる。それが将来的に学習の意欲やそういった問題が結びついてくるかというふうに思うが、キャリア教育は現状どうなっているのか。今、小中も、高校も、もちろんキャリア教育をやっているが、どこにどのような問題があるのか。最終的には例えば函館から外に出てしまうという、そういうキャリアを選ぶ子どもが今日の資料を拝見するとかなり多い。論点は、最終的に函館に残る、我々の地域を支えてくれる人材として残ってくれるのかということが、我々としては函館のための教育で行っている現場で来ているわけであり、重要なポイントだと思うので、事務局から参考資料2についてご説明いただきたい。

《事務局より、参考資料2に基づき説明》

(田中会長)

ありがとうございました。

参考資料2について、市内の高等教育機関、大学・短大の進学率が平成28年度9.9%、専修学校9.7%。そうすると市内の高等教育機関への進学が約20%ということになる。その比率はどういう傾向を示しているかということ、平成26年度には男女合わせて8.1%、それから専修学校、これが10.3%ということになっているので、ほぼ均衡が取れている、あまり変わっていない。これが1つの課題になるのかなと思う。

ただ、進学者数そのものはアップしている。平成26年度は、全部含めて市内・市外も入れて59.1%、それが平成28年度では61%に上がっている。ですから、進学率としては増加傾向にあるということと言えるかと思う。さらに男女の差も非常に大きいところがあり、男女で見ると、平成28年度の大学・短大の小計で男子が6.6%、女子が13.0%なので、市内の高等教育機関、大学・短大としては、女子高校生が狙い目であり、大きなマーケットとして売れているということになる。男子は非常に少ないという現状になっている。

あとはどうだろうか。専門学校は、やはり看護は女子が圧倒的に多く11.5%であり、それが引っ張ってる形になり、合計で言うと、専修学校は15.5%。女子はかなり市内に残っているということがこれから読み取れる。

さて、今こういった現状、たぶん関東圏では6割、高等教育機関進学率6割を超えている。札幌もたぶん50%ぐらいだと思うので、そういう意味では10%ほど函館は高等教育機関進学率そのものが低いと、そして、男女の差よりもあるという現状で

あるが、さて、今、こういったものを踏まえながら、地域社会に向かうキャリア教育、進路の指導に対する課題がどのあたりにあるのか、委員からご意見を頂戴したい。今、リアリティがある資料が提示されたので、いかがだろうか。

(中村委員)

中学校2年生の娘の話によると、今、ちょうど職業体験の時期であり、先生からのどんな職業を知ってるかという問いの答えが、まず消防士だったそうだ。娘の話なので全部を聞いているわけではないが、消防士という名前を出した子に続いて、みんなは士業、例えば、看護師だとか、保育士とか、そういう職業を答えとして発言したり、何のために仕事をするのかという問いに答えたりしたそうだ。生徒の答えは、自分の能力を活かした職業をしたいとか、地位と名声とか、そういうことよりも、お金を稼ぐなどの方向に偏っていたような気がした。

中学校2年生の子どもたち、小学校の時も町探検ということで自分の住む地域にどんな仕事、どんなお店があるのかというところまで学んでいるが、実際に自分たちがいろんな職場に体験に行こうという時に、どんな仕事があるのかという情報が足りなかったり、何のために働くのかというところもこういう機会に学んでいく、キャリア教育の一貫としての必要性、中学校からも小学校からもそういったことが、やはり必要なのだということを改めて感じた。

高校はもちろんキャリア教育ということで息子も勉強しているのだが、その時に面白かったのは、葉書を送るとタダで手に入るような、職業が載っている分厚い本を皆さんもらってくださいということで、それを教室に置いて何かの授業の時にどんな職業があるかを見たりしてるっていうのを聞き、面白いと感じた。そういった形でも、世の中にどんな仕事があるのかを学ぶことで、自分が将来何になりたいかっていうのを決める、手本になるのかなと思った。以上です。

(田中会長)

はい。大場先生どうですか。

(大場委員)

私は、就職委員長という立場もあり、出前授業で特に職業の話をします。私は情報アーキテクチャ学科なので、コンピューターに関係する仕事の話をするが、人気は低い。札幌でも人気は低い。今おっしゃられたように、札幌で人気が高いのは、学校の教員、看護師、消防士など、進学校では医療系です。

私が思っていることを言いますと、未来大学にも情報をやっつるにも関わらず公務員になりたいという子がいる。おそらく北海道だと子どもが普通にイメージするというのが、経済的な面であるとか、実際にはそういう職場が少ないので看護師などの自立できる仕事や公務員を選ぶ。安定、自立、その2つのキーワードで、進路指導をやっている時に、大学生だから自分たちの意向ももちろんあるが、会社選びや公務員になるというのは、ずっと子どもの頃からの親の指導が大きいと感じている。企業で言うと、一部上場会社の冠がついているビッグネームなどはやはり親が安心してオーケーを出すけど、そうではない初めて聞いた会社のことはわからない。そもそも情報系の会社のことを子どもたちは知っていても親は知らないという実態があるので、その辺はもう少し親の方を啓発する必要があると感じている。

ちょっと前の話に戻るが、函館の大学進学率について、大学・短大で10%ぐらいであるが、未来大学に来る比率は、道南、渡島・檜山からは、14から15%になる。ですから、函館以外で結構いるのだと、この数字を見て感じた。一方、道央から未来大に来る比率は40%です。それだけ見ると、道央の方が教育熱は高いのかとか、偏差値レベルが高いのか、情報に対する感度が札幌の方が高くて未来大に来るのか、いくつか理由は考えられるが、道南が15%に対して、遠いにかかわらず道央が40%、そういう実態がある。そして、函館市に就職する率は10%である。情報以外もある。病院、信用金庫、銀行、そういうところも含めて10%。そして、情報に限って言うと、私の調べでは、そもそも100人以上の会社が1社しかなく、社員何十人の会社では一定数、1人ずつでも未来大学の学生を雇うことができない。なので、10%というのも・・・

(田中会長)

Maxですか。

(大場委員)

Maxになってしまう1つの要因は出口がないこと。勤め先がないというのが1つ大きい要因であって、その結果、自立できる職業とか、公務員という安定性があるところに学生たちは行く。親もそのような職業に行きたくて欲しいと思っているのではないかと、そういう因果関係を就職委員長として私は分析した。これは新聞から取材を受ける時に調べてその実態がわかった。以上です。

(田中会長)

最終的に出口がないっていう問題がある。

(大場委員)

はい

(田中会長)

地域の産業の基盤というか、その地力。竹内委員に意見を頂きたいと思うが、函館のIT企業の数、大口が1社はあるが、それ以外のところは中小規模で、伸長していない、数が増えてない。雇用のパイが増えていない。これについて、どういったところに課題があると思うだろうか。

(竹内委員)

数値的なもので言えば100人以上の企業が1社しかないというのはその通りである。未来大の生徒の函館市へ就職する割合が10%というのがMaxだということも現状では十分理解できる。理解できるが、実際に親の理解が、大きな企業、安心できるところに子どもを就職させたいということもあるのだが、望ましくは、親もあえて子どもと離れて暮らしたいとは思っていないはずだ。今、言った出口があれば、ここで子どもと一緒に暮らしたいと思うのが本音だと思う。そして長期的な部分では、やはり何のために働くのかということ伝えていくというのはとても大事だと思う。労働観ですとか人生観ですとか職業観をもっと、これはもう学校ではなく、親や、我々経済界、経営者自らがこういったものを子どもたちに伝えていくという場、そして、毛利委員の発言にあったとおり、それが子どもにとってどの程度有意義かということと親がどの程度認めてくれるかというのが一番大事だ。

私がいつも思っているのは、例えば我々のような事務局が学校で話す機会はよくあるが、地域の経営者が子どもたちに話すという機会が思いの外少ないということだ。

経営者は、中小企業の経営者であってもやはり長く商売されている方は、我々と違った観点があり、地域の経済とか金融のことはもちろん、それ以外にも、地域の歴史、地域の市民の行動性など、様々な視点で地域のことを分析して商売をやっている方がたくさんいる。そういった方たちの声を多く聞いてもらって職業観、労働観などを養う機会に役に立てればと思っている。現状では、たしかに出口がないというのはそのとおりだが、教育が百年の計だということを考え、地域の企業の経営者が自ら情

報を開示して、うちには強みがあるんだということを地道に語りかけていくというのが大事だと思う。

(田中会長)

函館市の中小企業家同友会の方と付き合いがあるのだが、大卒を採用したことがない、どうやって採用したらいいのかと言ってる経営者が結構いる。大卒を1人もまだ採っていない。この状況で、1人採用したらもう格段の戦力、3人分ぐらいあるという、風を起こすことはできないだろうか。

(竹内委員)

あえて先程申し上げなかったが、このようになった実態は、やはり中小企業の経営者にありがちで、これまでいわゆる同族経営が多く、役員の方たちだけで利益を取ってしまい、労働者を出来る限り安い賃金で使ってきたというのが今に至ってしまっていると思う。地域の中小企業も、けっして大企業並みとはいわなくても、今の払っている賃金水準がMaxだということを私は思っておらず、もう少し利益の分配を適正に行えば、交通とかも発展してきたこの時代なので、もっともっと働きやすい環境を作っていけると思っている。これから人手不足になってくるので、これからもっともっと労働環境は良くなっていくのだが、それを待っているわけにはいかないので、やはり情報提供や、自らの口で語っていくということ。

それと若い起業家を育てるということ。働く場所がないのであれば自分で起業をしてリーダーになっていくという学生を育てるような、そういった支援制度を設けることまでもやはり考えていかなければならないと思っている。

(田中会長)

自ら仕事を作ってくださいるような学生を育てるということも、教育では課題かもしれない。

(竹内委員)

そうですね。

(大場委員)

未来大学には少しずついる。情報系で独立することはそれほど大変ではないのかもしれないが、起業して上手にやっている会社もある。『はこぶら』という函館のサイ

トの運営会社の社長は未来大の3期生とか4期生で、アルバイトに未来大の学生を雇っていて非常にうまくいってる。

最近何件かあったのが、函館出身で、東京に勤めていて、リタイア近くなって、50歳後半になって、結構、もう給料も下がってきている状況で、地元に戻りたいので情報の会社を紹介してくれという話があり、先週か先々週ぐらいだろうか、函館で働く人のための函館市就職ポータルサイトも登場したので、非常にいい傾向だと思っている

(田中会長)

そうですね。Uターンを支援していく。

(大場委員)

Uターン、Iターン、Jターンっていうのを。

(田中会長)

呼び寄せる装置ができたわけだ。

(大場委員)

そこに採用情報、中途採用情報などがまとまっているのが数十社ある。ニュースで取り上げられているのを見て、非常にいいと思った。

(田中会長)

ありがとうございました。今、社会的にも随分変わってきているというのがよくわかりました。

ここで学校教育の方にちょっと戻ってみたいのだが、私ども大学の教育している中で、先日、中小企業家同友会さんと連携協定を結んだことから、何か役に立つてるとはないかと伺ったところ、中小企業に大卒を採ったことがないという会社が多かったことから、会社の宣伝とは言わないが、良いところ、魅力を発信するようなキャリアブックというような、進路、会社紹介ブックを編纂してもらいたいということがあった。これは帯広などで随分成功している取り組みであり、私どもの学生がチームで30社ほど取材して、1年かけて結構立派なものを作った。会社の方からすると、社員が学生から色々インタビューを受けて、改めて自分の仕事の意義や、自分たちの会社が果たしている社会的な役割を再認識できたと言うことで、社員がとても元気に

なっているという評価が高かったという。発表会では立派なプレゼンテーションを行われ、最後に代表の企業の方が、学生諸君一人ひとりに、このプロジェクトを通して得たものは何か、それから将来どういう進路を進みたいのかと聞いた。そうしたら見事に、私はテーブルをひっくり返すようなことだと思ったが、「わたくしは小樽市の消防士になることを中学校の時に決めてるので社長、申し訳ございません」そのような答えが次々に続いた。「私は震災を受けた東北から来ており、自分は自治体に行って自分の街のためにここで学習したことを活かしたいし、社長さんには感謝しています」という話があったりした。それぞれいい進路を述べてくれたのだが、残念ながらその企業の意図とは全く逆になった。

ということは、さきほどその話があったとおり、親からの期待などで、中学校ぐらい、高校に入るときから進路というものはだいたい決めてるのではないだろうか。キャリア教育のターニングポイント、決め所について伺いたい。

(中島委員)

函館中部高校なので、どうしても大学進学に重点を置いている。入学した生徒に進路希望調査をするが、9割近くはとりあえず4年制の大学進学ということで、就職希望するのは、240名ほどの生徒の中で1人、2人という数である。そんな中で、具体的に、どんな大学、あるいは大学じゃなくて自分はどのような学問を勉強したいのか、あるいは興味を持っているか、基礎的な知識とかしっかりとした意志があるかといえ、そんなことはない。実際にはおそらく2年生の今ぐらいの時期から真剣に、今までずっと模擬試験など受けてますから、担任や親の方からも高校卒業したらどうなるんだとプレッシャーがかかってくるので、真剣に考え始めるのは、やはり2年生の後半ぐらいであるという印象を持っている。最初から一生懸命やる意識の高い生徒もいることはいるが、多くの生徒はやはり2年生の後半ぐらいから、自分の高校卒業後の進路について認識していく。

職業の選択ということであると、中学校でも色々とキャリア教育ということでインターンシップなど様々な形でやっている。仕事の大切さ、あるいは職業観、社会人としての心構えなどは何らかの形で学習しているとは思いますが、高校でも同じような取り組みを行っているが、中学校でやったキャリア教育やインターンシップと、高校ではどういう形で位置づけなのか、整合性というか、同じことをまた高校でもやってしまっただけでは生徒にとっては得るものもないわけだから、やはり違った視点で、どういう視点を持ってインターンシップに望むかということも大切だと思う。ただ、本校では、医進類型を行っており、地域医療を支える人づくり事業ということで、道教委の方か

ら研究指定授業になっていて、特に全学年対象に、例えば、市立病院を始めとする医療関係の方に直接研修や見学、体験ということで出向いたり、また、医療機関の方から色々と来ていただいて、医療の現場の実情とか、仕事の大切さ、大変さとか、そういった講義を行っており、医療を志す生徒については手厚く指導されていると思う。

(田中会長)

人気のあるインターンシップ先というのはございますか。

(中島委員)

特に人気というものはないが、やはり公務員。公務員への就職を希望している生徒もいるので、渡島振興局の方に行くなどの形はあるが、ただ、具体的な取り組みというと、うちの生徒の場合は、やはり医療機関への人気があると思っている。

(田中会長)

ありがとうございました。今、高校のキャリア教育というお話ですけども、中学校のキャリア教育というのはどのように行われているのでしょうか。いわゆるインターンシップっていう体験型や、あるいはテキストを、資料を読み込んで探究型で・・・

(毛利副会長)

どちらもある。探究型で、職業調べることは、ほとんどの学校がやっているはずだ。そしてプレゼンまで行くということと、先ほど、中村委員から出てきたように、今、まさに2年生が職場体験の時期を迎えており、我が校では1日程度しか取れていないが、ニーズが多いので朝から70箇所ぐらいを訪問する。1箇所あたり10人、20人で行けば訪問先が少なくて済むのだが、それでは何にもならない。先ほど、竹内委員から経営者と子どもの話があったが、顔を突き合わせて本当に一緒に仕事をするのなら2、3人で受け入れたいというのが企業側の要望だ。そうすると本当のキャリア教育ができると。そのために70箇所ぐらい頼んでいるのが、間もなくうちの学校で行われる。

それから、先ほどから話題に上がっている働く意義。そういう話が出ている時に、やはり、生き方の指導・学習は欠かせないので、調べ学習も、体験学習も、働く意義の学習も、ということで、中学校ではカリキュラムが作られている。

(田中会長)

働く意義と生き方の指導はキャリア教育の中心、基本的なキャリア教育の原点である。

まず「なりたいもの」がある。それから能力による「やれること」がある。それから「社会から求められていること」というのがあり、医療などはその典型だと思うのだが、その3つがちゃんとオーバーラップして重なるところが、まさに自分のキャリアを選択するところだ。

例えば、教育で、大学でどのような能力を作っていくかについて、キャリア教育には3つの効力があり、1つは自分の能力を高めてできることを広げていく、あるいは深めていくこと、もう1つは、先端医療などITの技術革新や障がい者のための様々な医療器具の改良などモノを開発することが社会的にも求められていること。あとは、そこで初めて自分がやってみたいという魅力だ。その3つ揃っている、3つを高めていくことは、どの段階でもたぶん同じなのではと思う。大学も同じだし、中学校も高校も同じだと思う。

進学校を批判するようで大変恐縮なのだが、進学校のキャリアカリキュラムの中に、自分ができること、やりたいことを、本当に追求・探究していくプログラムというのが、どのぐらい位置づいているのだろうか。そこが非常に寂しい気がしており、大学で先ほどの消防士の笑い話みたいな、企業と協力してプログラムをやったわけだが、本当は大学生では遅いと私は明確に思った。大学でやるべきプログラムではなかった。中学生ではちょっと難しいかもしれないが、高校のキャリア教育として、企業に乗り込んでいき、そういうキャリアの実習型のプロジェクトみたいなものがあると、高校時代から自分は企業を起こしていこうとか、そんな子どもたちが函館でも生まれてくるんじゃないか。ぜひ高等学校にそういうインターンシップを超えるもの、企業の魅力を知り尽くして自分たちで紹介して、本当に自分がその企業の社員になったつもりになるような、企業と連携してそういう取り組みはできないのだろうか。竹内委員、そういった取り組みはこれまでにあるか。

(竹内委員)

これは、できないかと言われれば、やらなければならないことだ。まさにおっしゃるとおり、大学生だと、ある程度自分の将来について自身で考える年齢だと思うが、実際に高校の時にそういったことを体験して、それを実行するのが大学生になってから考えるということですから、やはり、中学生、高校生の時に、生の経営者の声を聞

かせたい。

私は職業柄地元の経営者の方と話をするが、本当に色々な角度から函館を見ており、例えば生々しい話、自分が一代目の社長であると、金融機関からお金を借りるために、生命保険にたくさん入るしかないんだと、自分に万が一のことがあっても生命保険で返せますよというところを見せて、膨大な生命保険をかけて企業をここまで大きくしてきたんだと。そういったところは君たちサラリーマンにはわからないだろうという話があったりする。

そこまでいかなくても子どもたちに経営者が持っている独特の経営学みたいなものを伝えたい。長くやっている企業さんの経営者というのは、思ったより勉強し続けており、経済のこと以外でも、歴史のことやマーケティングのことなどすごく勉強している。そういった生の声を子どもたちに、できれば中学・高校のところで届けて欲しいと思うのが1点である。

また、その経営者の話とは別に函館のことを子どもの時から何とかして好きになってもらうというところ。子どもたち自身が函館が好きだということと、与えられた情報を中学生・高校生の時に持つと、この両面のところからなんとかならないかなと思う。

(田中会長)

中学校の職業体験、実習型がいま中学校で行われている。

最近知った事例で、日生（ひなせ）という岡山の干潟があり、アマモという植物が海に生えている。海が汚れてすっかりアマモが無くなってしまうと漁獲量が減り、漁師が半分やめてしまい、残った漁師はカキの養殖を始めた。しかし、水が汚れているので、カキの養殖も不作だったり壊滅したりでひどい目にあっていた。そこにアマモの種を植えるという発想を持った方がいて、中学生がそのアマモの種を取る、拾って集める役割を協力している。そして、漁組の人たちの指導を受けて、海に撒いていった結果、アマモがどんどん増えて水が浄化され、カキの養殖が安定した。漁師も非常に喜び、カキの養殖イカダを中学生にも1つあげようということになり、収穫祭まで行い、採れたカキを中学生に持って帰らせている。

中学校の先生が言ってたのは、彼らがこのような体験を通して漁師になる者が出てくるのは漁師として嬉しいが、そんなことは全然考えておらず、将来彼らが社会に出た時に、日生のカキを絶対買ってくれる。遠くに離れても、ふるさと納税で日生に税金を払ってくれるかもしれない。どこかで応援してくれる人になってくれれば良いという考えであるということだった。

函館から出ていっても函館を応援してくれる人になればいいわけですから、そういう刻印を残す、それが我々の希望だと思う。

(竹内委員)

まさに刻印を残すということだと思う。

(田中会長)

中学校ぐらいから、小学校に遡ってもいいと思うが、地域で自分は育てられたという何かインパクトが残るような体験を含むようなキャリア教育が函館スタイルのような形であったら良いとわたしは思う。ちょっと、みなさんの考えておられるキャリア教育のイメージについて意見を伺いたい。

(齊藤委員)

先ほど、田中会長が述べたキャリア教育の、「なりたいもの」、「やれるもの」、「求められるもの」という観点から言うと、やはりモデルを知ることが一番身近に考えられると思う。

モデルというのは、例えば、自分の能力に合った、自立できる、できれば安定した仕事で、生き生きと働く姿。または、自己実現をして魅力的な人間。そういう人を見る、または、その人の話を聞くことによって、子どもたちは「こういう人がいるんだ。」「こういう仕事をしている人がいるんだ。」「こういう素敵な人がいるんだ。」ということから、そこに近づきたいというふうに思うと考える。職業選択していく上では、子どもだけではなく、親の意見というのも非常に大きなものなので、できれば、その機会に親と一緒に、それらを聞いたり見たり体験できる機会があれば良いと思う。

「なりたいもの」で考えると、先程から言っているこれからの職業として、人でなければできない仕事、人として魅力的な仕事について、こちらの方で例を挙げると、保育士はなりたい人がとても多いが、とても給料が安い。ですから、「やりたい」、そして「求められている」その仕事の賃金が上がらないだろうか、というところがまずは1つです。

それから「求められる」ということは明らかに、これからは情報を使いこなす仕事というものが求められるわけですから、それらを縦の接続の中で求められる仕事として捉えて、教育の中に取り入れていくということと、先ほどのお話にあった、起業をしたい若者に対して、例えばノウハウだったり、企業の成功例だったり、そういうと

ころを支援していくというのが2点目だ。

3点目の「やれるもの」という話で、最近、パラリンピックで銅メダルを取った辻沙絵選手は、私が中学で教師をしていた時に教えていた1人であるが、その辻選手の活躍を見て、函館の人の中でどれだけの人が励まされ、生きるということを考えただろうと思った。これは函館の教育の中で、「やれること」は何かを一緒に考え、適切にそこにアドバイスをし、寄り添って歩んできたからこそ今の彼女があると考えても良いのではないかと思った。自分もそういうふうに住きたいと思うモデルとなる人を、小さい頃から間近に見た方が良いと思うので、彼女をはじめとした魅力的な方々の生の声を聞く機会を是非、函館の教育の中で作っていただきたいと感じている。

(田中会長)

成功例をどんどん発掘していくことだ。

(齊藤委員)

子どもにとっての一番身近なモデルは家庭である。しかし、以前に資料でいただいた家庭のモデルを見ると、先ほどの進学資料と同じように、女性が多く、母子家庭で、配偶者がいない、そして離婚率が高い、というのが函館の特徴になっていて、子どもたちが家庭内を一番の自分の生き方のモデルとして見た時に、どうしても不足している部分があるのではないかと思う。家庭でやっていることも素敵だが、そこよりも、もっと自分がこうしたいという素敵なモデルを見た時に、こういうこともあるんだと、こういうふうになりたいと感じるところが必要だ。

(田中会長)

ありがとうございました。絹野委員、意見を頂きたい。

(絹野委員)

先ほどキャリア教育の中で「なりたいもの」、「やれるもの」、「求められているもの」と、それが非常に大事だということだが、子どもたちは安定した生活を求めているだろうと思う。小中であろうが、高であろうが、大学であろうが。そういう意味では、竹内委員からの、いわゆる現場の声、現場の魅力については、経済的に安定したことを、まず親も子も考える狙いがあると思う。そういう意味では函館の魅力、仕事の魅力など、そういうものを現場の社長にいろいろ教育してもらうことは、非常に大事なことはないかなと、私は思った。

(田中会長)

親も一緒に学べるインターンシップ、親子インターンシップというのは面白いかもしれない。どうでしょう。

(井上委員)

少し前に、函館市が主催している「カルチャーナイト」という小学生対象のイベントに息子と一緒に参加した。年に1回ぐらいしか開催していないと思うが、函館市役所を始め、市内の色々な企業や施設など好きなところを親子で回ることができる。夕方からの開催なので、両親も仕事終わってから子どもと一緒に回り、こんな会社があるんだとか、働いている方と直接触れ合うことができ、縦の繋がりとして非常にいい活動だった。

(田中会長)

先行的モデルが、すでにそういう活動があったということか。

(井上委員)

たくさんの方が参加しており、バスも出て、すべて見て回るには時間が足りないぐらいだった。

函館学が必要という話が前回から出ているが、特別に函館学というのを学ばなくても、私の周りでもみんな函館のことはすごく好きなんだと感じている。やはり食も素晴らしいし、文化もすごく長い素晴らしい歴史があるというのは十分分かっているのだが、優秀な学生ほどやはり函館を出ていく。有名大学に入るために毎日何時間かしか寝ないでずっと勉強しているのも勤めてる学校で知っているのも、その子たちにはどんどん日本だけでなく世界に出ていくほどに頑張りたいと思っている。

その子たちがまた函館に戻ってきてもらえるぐらい、素晴らしい企業や学校があれば良いのだが、今の状態の函館に優秀な子を留めておくのは、もったいないことだと思う。

(田中会長)

山田委員どうだろうか。

(山田委員)

先ほどからキャリア教育の話が出ているが、小学校では総合的な学習として、いろんな店に行ったり、低学年はどんな仕事があるのかということ学習している。先ほど70箇所ぐらいに訪問しているという話があったが、基本的に、働くということ子どもたちに教えるには、どこかの教育のフォーラムで働くことについて、「はたらくは傍（はた）を楽にすること」という話をしていたが、基本的に汗をかいて、働く。そういう主義でいいのかなと思っている。何のために働くかといえば食べるためかもしれない。そのあたりを見せていくということでは、会議前、中島委員に、最近の高校生はアルバイトをしているのかと聞いたのだが、やはり一番生身で感じるのはアルバイトとか、実際、現場に出て汗をかいて怒られて、仕事の手順を覚えて、という体験が子どもたちには必要だと思っている。

今日の資料を見たところ、市内では女子の進学率の方が高い。さらに大きく違うなと思ったのは、就職・進学以外の者が13.6%と、特に男子に多い。この男子いったい何をやっているんだ、もったいないとこの資料を見て思った。

先日、新聞に名寄の市立大学のことが出ていたが、短大から四年制の大学にして、学生が増えて街が活性化したというお話で、ちょっとした色々な所にヒントが転がっていると思う。さらに、新聞でちょうどこの間、中学3年生が少子化対策委員会の会議の委員になったという記事があった。そういう発想の転換も必要になってくると思っている。

子どもたちにはバーチャルではなくて、実際に体験させたいなと小学校では思っている。以前に、ある中学校の校長先生が、うちの学校は地域に愛されていて、通学路の確保に地域のお年寄りが横断歩道を除雪してくれると言ったのを聞いて、私は逆だろうと思った。中学生がお年寄りのところに行くと、汗かいて除雪したら子どもたちに、働くってことはどれだけ人に喜ばれることかということを感じさせることができるのに、と思った。今、キャリア教育について、皆さんの話を聞きながらそういうことを感じていた。

(田中会長)

ありがとうございます。

定刻に達して8時になったので、次回の流れも考えていかなければいけないが、事務局としていかがだろうか。今日はこういったところで。キャリア教育で終わったが、その中で横の連携が欠かせないという、企業と学校というものあるだろうと思

ます。

(2) その他

(事務局)

ありがとうございます。

第4回の日程は11月下旬の開催予定となっており、委員のみなさんと日程調整のうえ後日案内する。

また、2点目、11月5日の土曜日に「はこだての未来・教育フォーラム」の開催を予定している。岐阜県の高等学校の浦崎太郎先生をお招きしての基調講演、その他パネルディスカッションということで、本協議会の田中会長に進行をお願いしながらパネリストの皆さまにご意見をいただく内容というふうに考えておりますので、よろしくお願ひいたします。

(田中会長)

他に何か提案などあるか。

(毛利副会長)

提案ではないが、今日一通り話を聞いて意見を言いたい。まず、竹内委員から出たように、やはり子どもに触れさせるのは、それから齊藤委員がモデルという言葉を使ったが、やはり本物に触れさせたい。これから函館市で計画を立てるときに、単に学習のシステムってということばかりではなく、いかに本物の人材を関与させるかについて、努力していただきたい。

それから、そうやって互いに企業の方から教育に手を差し伸べるとか、学校側から手を差し伸べるとか、それから、齊藤先生が最初に述べたように、単に幼稚園という枠を飛び越えて、横に手を伸ばして幼児教育の先端的役割を果たすとか、いろんな手を伸ばすというのは、結局ここで仕組みを作ったところで、官が決めて民が従う時代ではない。民が自分から手を差し伸べない限り、この先進まないと思うので、函館市全体でそういうことを考えたり、意識づけたり、意識を持つ人がどんどん行動したりということをししないと何も変わっていかないと、私は今日、話を聞いていて思った。長い目で見れば、幼児教育であったり、学校教育であったり、函館の子どもたちをそのような意識で育てていく必要があるかということでは、市教委の方もちょっと、ポイントととして必要じゃないかと思う。

それから、どうしても手を上げて言いたかったのは、「夢は必ず実現する」というのは大嫌いな言葉だということ。自分が受け持ったいろんな子どもたちを見ていて、どこからでも夢を見つけられる、探し続けるような人間、それから、何とかどんな立場、どんなポジション、どんな状況になるかわからないけれど、自分は何とかそこからやっていけるという、そういうハードルをクリアしていく人間に育てないと、みんなが夢を実現しようと思ったら無理がある。しかし、山田委員が述べたように、働くことそのものに価値を見つける、人のお役に立つことが働くことなんだという、それが支え合って社会が成り立っているんだということを、教育の中に埋め込んでいかないとならない。

(田中会長)

キャリアは柔軟ですよ。

(毛利副会長)

そうなんです。だから、そこは計画を作っていく上で、外すことができないと思う。

(田中会長)

皆さんもそれぞれ途中で設計変更していると思うが、初志貫徹できてる方がどのくらいいるだろうか。

(毛利副会長)

私も教員になるつもりは無かった。齊藤委員から辻紗絵さんの話が出ましたが、やはり、ああいう人に触れた時の生徒は全然違う。だから最初の話に戻りますけど、やはり本物に触れ合えるような環境づくりを是非行って、その時にお互い手を差し伸べられことができるような函館市になってほしいと思っている。以上です。

(田中会長)

それでは本日はどうもありがとうございました。言い漏らしたことございませんか。

(学校教育部長)

1時間半以上に渡る、明日の函館の教育について熱い議論していただきありがとうございます。

ございます。今日で3回目になったが、私なりに基本計画を想像しながら皆様のお話を聞かせていただいた。横の接続というのは、結構これは簡単にできる、ところが今日の話でもそうだが、縦の接続が意外と難しい。それは当たり前で、当然、年代も違い、組織も、機能も、全く違うので仕方がないのだが、だからこそ函館市が今、作ろうとしている教育振興基本計画というものが大事になってくるだろうし、それと併せて函館の教育が目指す人間像、これを明らかにしないと、縦の接続はないだろうと思っている。

先ほど、何人か委員の方がおっしゃっていたが、もちろん函館で活躍できる人材、これは絶対必要だが、それだけではおさまらない実態があるので、函館で学んだ人材が、全道・全国で、世界で活躍するという、これも函館の教育が目指す人間像だろうと思っている。その人間像に迫るための考え方にキャリア教育が重要だという話だった。キャリアを形成していくそれぞれの段階、キャリア発達だが、幼稚園の時は、例えば、人を思いやるとか、ものを譲るとか、そういうことの積み重ね。果ては中学校になると、やりたい職業だとか、そして高校に行って具体的に自分にはこんな力があるから社会貢献のために結びつけたいとか、だから大学ここに行くんだっていうキャリア発達、それぞれの段階で必要だということも見えてきた。

その中で、これまで3回の会議の中でキーワード、柱になるもの。例えば、学び方、アクティブ・ラーニングということが外せない。次の学習指導要領を踏まえると。それと、今日のお話の中では仕組み、決して官からの仕組みではなく、民からの仕組みとか、官を合わせての仕組み、育てる仕組みが実は必要だということ。

それから、環境という話が出てきた。繋がる環境だとか、おそらくそういった言葉がキーワードとなるよう教育振興基本計画を組み立てていくと思っている。

いずれにせよ、今年度は来月のフォーラム、それと残り2回ほどの協議会を予定している。委員の皆様と事務局の方で目指す函館の人間像、それが明らかになっていくと思っている。

長くなったが、本日はどうもありがとうございました。

(田中会長)

それでは本日3回目の協議会を終了させていただく。ありがとうございました。

3 閉 会